

担当部局

教育学専攻

評価項目 1	(ア) 体系的な履修を促す科目編成となっているか (イ) 開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・ 開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・ 大学院要覧 ・ 大学院アンケート

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)教育学専攻では、1・2回生で教育学の高度な専門的な知識や研究に取り組む「教育学特論」、2回生で大学院生各自の研究を深め修士論文に取り組む「教育学課題研究」、さらに、9名の教員全員で大学院生の研究指導を行う「教育学演習」を配置する体系的なカリキュラムを設けている。

2021年度は「教育学特論A・B」は「教育哲学」「教育行政学」「比較・国際教育学」「生涯教育学」「家庭教育学」「教育方法学」「教育社会学」「教科教育学Ⅰ」「教科教育学Ⅱ」「教科教育学Ⅲ」の10科目を開講し、幅広い教育の分野を専門的に学ぶカリキュラムとなっている。

現在教育学専攻では、新メンバー2名を加えて11名とし、「特別支援教育」に関する科目、幼稚園専修免許状科目3科目、実践的科目を新設することを検討しており、さらに充実したカリキュラムを目指している。

(イ)2021年度は、前後期合わせて26科目中非常勤講師担当は1科目、特任教授担当科目は2科目で、特任教授を入れても12%、非常勤講師のみであると4%である。開講科目数は適正と考えられる。

【成果が上がっている点】

2021年度大学院アンケートの発達教育学研究科結果総括では、授業内容、授業レベルについて肯定的な回答が得られている。各教員は大学院生各々のニーズに応じた授業を工夫して行っている。また、大学院生各々の研究について教員全員が指導を行う「教育学演習」では、大学院生の研究を深める極めて良い機会となっている。教育学専攻の大学院生のみを対象とした客観的なデータはないが、教育の成果が大いにあがっていると考えられる。

【課題となっている点】

上記のように、充実したカリキュラムを提供しているにもかかわらず、ここ数年、入学生が少ないことが大きな課題である。教職を目指す学生の減少、教職大学院への進学等がその要因と考えられる。そこで、現在、研究と実践との往還をめざす教職志望者を対象とした実践的科目「フィールド研究」の設置を検討中である。

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・大学院アンケート

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

専攻内での院生のアンケート結果を参照することができないため、主観的な推察として記述する。

【成果が上がっている点】

少人数指導による履修指導や指導への熱意は学生にも伝わっているものと考えられる。その一方で、教育学演習ⅠA、ⅠB、ⅡA、ⅡBは複数の教員によるフィードバックの機会が保障されているため、多面的・多角的な視点から修論指導がなされ、役立ったと考えられる。

【課題となっている点】

院生の研究室が教員の研究室があるE棟から離れているため、日常的に学習支援や質問をする機会がもちにくいことや、資料作成のための印刷室が遠いことが課題として考えられる。

院生の人数が少ないため、互いに助言し合ったり切磋琢磨しあったりする機会が限定されることが考えられる。

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・成績分布（GPA・得点）（科目群別・3カ年）←大学院に関する資料ではない ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問）←大学院に関する資料ではない

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 成績評価については、シラバス記載の達成目標・評価方法に基づき、適切に行われている。複数教員が指導にあたる科目については、協議により評価を決定することで成績評価の妥当性を保証している。フィードバックについては、シラバスに記載の通り、各課題に対するフィードバックは授業内で実施されている。特に、教育学演習ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡB等については、複数の教員からの指導を行うことにより、院生の研究成果に対するフィードバックがなされている。大学院に関する成績評価・フィードバックに関する参考資料がないため、各教員からの聞き取りに依存しており、十分な検証ができない。大学院アンケートにおける成績評価及びフィードバックに関する項目の作成が不可欠である。

(イ) 成績分布の偏りについては、受講者数が少ないため、検討することはできない。大学院に関する成績分布（GPA・得点）の参考資料がないことは問題である。

担当部局

教育学専攻

【成果が上がっている点】

特記すべき事項なし

【課題となっている点】

（ア）検証が可能となるように、大学院アンケートにおける成績評価及びフィードバックに関する項目の作成

（イ）検証が可能となるように、大学院に関する成績分布（GPA・得点）の資料作成が必要であるが、大学院という性質上、成績分布に偏りがあるからといって、相対的に評価することは馴染まない。今後の検討が必要である。

評価項目 4	（ア） カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 （イ） 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・ 授業担当一覧 ・ 科目群別非常勤比率（3カ年程度）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）授業担当一覧を確認すると、教育学の各分野にかかわる講義として、教育哲学特論、比較・国際教育学特論、生涯教育学特論、家庭教育学特論、教育方法学特論、教科教育学特論などの専門科目、また、学生の自発的探究力を高めるために、教育学課題研究、教育学演習などの演習科目について、専任教員を配置している。また、非常勤比率を確認すると、他学科専攻と比較しても低い傾向にあり、専任教員の配置は適切であるといえる。

（イ）科目群別非常勤比率を確認すると、教育学専攻では科目群別非常勤比率の値は 1.8.%となっている。これは過去 2 年間で大きくは変わらない状況であり、他学科・専攻と比較しても低い傾向となっている。以上より、適正な非常勤比率のカリキュラムとなっているといえる。

【成果が上がっている点】

カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置していることの影響により、2021 年度大学院生アンケート「Q1 授業内容」「Q2 授業レベル」の項目では、いずれも「大変当てはまる」との回答が 5 割を超えており、「やや当てはまる」も含めると、いずれも 100%となっている。このことは、学生の多様な研究関心に応じたカリキュラム構成になっていることを示しており、専任教員の配置が適正であることが伺える。

【課題となっている点】

カリキュラム上主要な科目に専任教員を配置はできているものの、今後カリキュラム改編が控えていることから、教員配置も意識して改編を進めていく必要がある。また、学士課程において 2019 年度より発足した「特別支援学校教諭養成課程」に関連して、専修免許を取得できる大学院のカリキュラムについて継続して検討する必要がある。

担当部局

教育学専攻

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート

≪各部局による点検・評価≫

【検証結果（全体概要）】

教育学専攻では、修士論文に関する指導を充実させるために、年間を通して、全専任教員の参加による「教育学演習」の時間を設けている。院生の修士論文の研究指導を担当教員だけでなく、多様な研究領域の教員による多面的・多角的な視点から検討することで、研究の質の向上を図っている。また、様々な機会に大学院専攻会議を開催し、大学院教育の改善に向けた話し合いも行っている。

このように、全専任教員が参加する研究指導や話し合いを通じて、教員間相互の研究指導のチェックや研究交流が生じ、質向上・改善に資する活動が日常的に行われている。

ただし、今後はこれまで行われてきた取り組みを可視化する形で、より組織的に FD 活動に取り組んでいく必要がある。

【成果が上がっている点】

上記の取り組みにより、教員の研究手法・研究指導などについて、教員相互の理解が深まっている。

【課題となっている点】

今後、FD 活動として教育の質向上に関する組織的な取り組みを順次行っていく必要がある。例えば、教員相互による授業参観、研究交流、アカハラに関する勉強会などが考えられる。

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・ 教員組織編制方針 ・ 専任教員の状況

≪各部局による点検・評価≫

【検証結果（全体概要）】

(ア)教育学専攻の教員組織（9名）は、60歳代2名（約22%）、50歳代4名（約44%）、40歳代3名（約33%）となっている。

年齢構成に関して著しい偏りは見られず、バランスよく構成されているため、特段問題はないと判断できる。ただし、性別に関しては、男女比が7:2となっており、やや偏った傾向が見られる。また、職位構成に関しても、教授の比率が約78%となっており、やや偏りが見られる。そのため、後任

担当部局

教育学専攻

人事に関してはジェンダーバランスを考慮した上で、30～40歳代の講師・准教授の採用について検討を要すると考えられる。

（イ）カリキュラム関連については、研究科・専攻のカリキュラム・ポリシーに基づき、必要な専門領域に関する人材が適切に配置されている。また、講義を中心としたコースワークと演習などの指導を通したりサーチャワークとが組み合わさって適切に実施・展開されている。教員組織は、こうした高度な知識と研究手法の修得を目指した教育課程に適ったものとなっている。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし。

評価項目 7	教育活動予算において実施している活動は、その目的に対してどのような成果をあげているか。
参照資料	・教育活動予算の執行状況

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

大学院には教育活動予算が計上されておらず、この予算を使用して実施する活動が現状では存在しないため、評価ができない。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

教育活動予算が計上されていれば、大学院の学生の教育のために必要な活動（たとえば、外部の研究者をゲストスピーカーとして招聘したりするなど）が行えるが、現状はこのような活動ができていない。

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

教職志望者を対象とした実践的科目の設置や 学士課程において発足した「特別支援学校教諭養成課程」に関連する専修免許を取得できる大学院のカリキュラムの具体的検討・設置など、充実したカリキュラムの実質化。大学院アンケートにおける成績評価及びフィードバックに関する項目の作成。学習支援や質問の機会など日常的に研究交流できるように、院生と教員との研究室配置の改善。